イエスは主なり

日本クリスチャン・アシュラム連盟

日本アシュラム

アシュラムとはスタンレー・ジョーンズ師がインドの退修方式を取り入れて創設されたキリスト教の新しい祈祷運動である。

開心・静聴・充満・献身・奉仕　184号

「主イエスの執りなし」

（マルコの福音書7：34～35）

佐々木　雄次

マルコ福音書7章34－35節に「（イエスは）天を仰いで深く息をつき、その人に向かって、『エッファタ（開け）』と言われた。すると、たちまち耳が開き、舌のもつれが解け、はっきり話すことができるようになった」と記されています。これは「耳が聞こえず舌の回らない人」がいやされた時の記事ですが、わたしたちは、「耳が開き、舌のもつれが解け、はっきり話すことができるようになった」ことだけに目を向けて、主イエスが「天を仰いで深く息をつかれた」ことを見落としていないでしょうか。

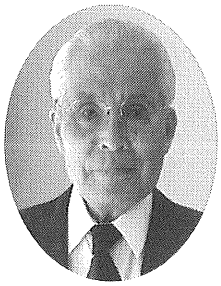
「天を仰いで」と言うことですが、この人が救われることを願われ、主イエスは、まず、天を仰ぎ、父なる神に助けを求められました。詩編121編に「わたしの助けはどこから来るのか。わたしの助けは来る。天地を造られた主のもとから」とありますが、天地を造られた神こそ主イエスの力の源泉でした。

天を仰がれると主イエスは深く息をつかれました。ある聖書では「ため息をつき」と訳し、他の聖書では「嘆息して」と訳し、また、個人訳ですが、「うめき声を出して」と訳しています。それは「耳が聞こえず舌の回らない人」がこれまでついてきた「ため息」や「嘆息」「うめき」を主イエスが御自分のものとされ、うめき声をあげられたということでしょう。イザヤ書53章4節に「彼が担ったのはわたしたちの病、彼が負ったのはわたしたちの痛みであった」とあるように、この人の悲しみ、苦しみ、そして罪を、主イエスは御自分のものとして引き受け、悲しみ、苦しまれたのであります。

また、「うめき声」という言葉は、「“霊”も弱いわたしたちを助けてくださいます。わたしたちはどう祈るべきかを知りませんが、“霊”自らが、言葉に表せないうめきをもって執り成してくださるからです」（ロマ8：26）という御言葉を連想させるのでないでしょうか。主イエスは、どう祈るべきかを知らないこの人に代わって、言葉に表せないうめきをもって執りなしてくださったのであります。そして、父なる神への全幅の信頼をもって「エッファタ（開け）」と言われたのであります。

（函館栄光キリスト教会牧師）

霊想



「祈りに生きる」
コロサイの信徒への手紙　四章二節他

早良キリスト教会牧師
今村　幸文

ゲッセマネの園で私たちの罪の救いのために十字架を担う祈りを捧げておられた主イエスは、眠りこけている弟子たちに「目を覚ましていなさい」と繰り返し言われました。

また主は主の栄光の再臨を待つ態度が「目を覚ます」ということに尽きると教えられました。私たちは祈る時、苦難と十字架の主を覚え、また主が再臨の栄光の主であることを確信し、目を覚まして祈りたいと思います。「目を覚ます」というギリシャ語はグレゴレオーです。この言葉からグレゴリウスという名の人々が出ました。教皇グレゴリウス一世は、「教皇は神の下僕たちの中の下僕である」と言って敬虔な生涯を貫きました。貧しい人々を助け、避難民や異民族に捕われている人々のために穀物や金銭を与えたり送ったりして多くの人々から慕われたのです。

「どんなことでも思い煩うのはやめなさい。何事につけ感謝をこめて祈りと願いを捧げ、求めているものを神に打ち明けなさい」（フィリピ四章六節～七節）イエス・キリストは私たちに対する神の恵みそのものです。わたしたちの感謝は、イエス・キリストから泉のように溢れ出ます。それ故「感謝を込めて」祈ります。そして感謝は奇跡を引き起こします。五千人以上の人々への給食に際して主イエスは五つのパンを感謝して分け与えられました。「感謝は祈りの翼である」と言われます。感謝という翼に運ばれて祈りは神のもとへ届けられるのです。また「感謝を込めて」ということは、神の主導権に服する信仰の姿勢を指しています。

「ひたすら祈りなさい」とあります。「ひたすら」とは、継続的に、ぐらつかず熱心であること、祈りに変わらない注意を払うことです。第一テサロニケの五章十七節に「絶えず祈りなさい」とあり、十九節に「霊の火を消してはいけません」と続いています。御霊は生きて働いているのです。御霊の火に燃やされて、ひたすら祈りたいものです。福岡新生キリスト教会の聖書講演会の奉仕に導かれました。竹田浩先生を始め牧師スタッフの方々は四十日間の断食祈祷を捧げて備えられました。真に祈りの霊が充満する中でみことばの御用に仕える恵みが与えられました。

歴代誌上十七章にダビデの祈りが記されています。「わが神よ、あなたは彼のために家を建てるとしもべに示されました。それゆえ、しもべは祈る勇気を得ました」。（口語訳）

私たちの毎日の歩みに神のみことばがいのちをもたらすように、神のみことばは私たちの祈りにもいのちをもたらします。神のみことばを直接祈りの中に持ち込むことは神の力を直接祈りの中に持ち込むことになるのです。

信仰の先輩でありました故米谷美知蔵兄は死の床で詩編二三編を口ずさまれました。そして両手を天に伸ばし、やがて静かに手がさがりました。米谷兄の召天でありました。

最後に「とりなしの祈り」について。多くの人々は自分のためにとりなしの祈りが継続的になされていることを知って心が奮いたたされてきました。わたし自身骨髄腫を患って、多くの方々のとりなしの祈りで主に生かされていることを実感しています。

「とりなしの祈り」は最も完全な形の祈りです。主イエスが御座にあって常に祈っておられる祈りはとりなしの祈りです。「主の祈り」は福音全体の要約、教会をつくる祈り、世界を包む祈り、とりなしの祈りそのものです。主の祈りは一句一句間を取って祈りたい。

主の祈りは、礼拝だけではなく個人的にも祈ります。その際「われら」という複数形であることを忘れないようにしたいのです。今日様々な状況の中で苦しみ、悲しみ、痛みを背負っている多くの兄弟姉妹があります。「われら」の中に世界、社会、教会の人々を覚えて祈りたいものです。

立証

「み言葉に聴き従う信仰」

（前）大阪住吉教会牧師
脇田　眞一

私達は、日常生活において、多くの問題に出会い、み言葉を与えて下さいと真剣に神に祈る。私は、神は生きておられると、全身全霊で言わずにはおれないことを何度も体験した。この体験を重ねている中に、信仰の深まりを経験した。

私は肉腫という癌が腹の中に出来、癌の転移や再発を繰り返し三度腹を切開して癌の摘出手術を受けた（摘出肉腫は六.二kg）。後腹膜（背中側の腹膜）にできた腫瘍が小腸に竹輪状に巻きついており、小腸を二

箇所切断して腫瘍を切り離した後、小腸を繋ぎ、腫瘍の発生元である後腹膜で腫瘍を切断する手術を受けた。手術を受ける数日前に、家族に対して、手術の危険性の説明があった。更に手術前日の夕方、外科部長から私は呼び出された。外科部長が言うには「あなたの腫瘍はこの病院始まって以来の大きさです。非常に難しい手術になり、途中で止めるかも知れません。出たとこ勝負です。このような状態ですので、あなたは死を覚悟して置いて下さい」と言い渡された。妻にこの事を知らせようかと思ったが、妻は非常に心配するし、子供達も心配するだろう。それなら、自分だけに留めて置こう。しかし、若し、明日死んだら、本人は既に死を覚悟していたことを記して置こう。そして遺言を書き始めたが、これが私のこの世に残す最後の言葉になると思うと、感情が高ぶり、一文字も書けない。仕方なく、ベッドの上に正座して祈り始めたが、私の死後、家族の生活や自分の死についての問題等が心に浮かび、心配や不安等で感情が高まっていた。しかし、祈っている間に、不思議に心が整えられ、やがて最後に、『天のお父様、一切のことをあなたにおゆだね致します』と言い終わった瞬間、『わたしは、強く雄々しくあれと命じたではないか。うろたえてはならない。おののいてはならない。あなたがどこに行ってもあなたの神、主は共にいる』（ヨシュア記一章九節）。このみ言葉が不意に与えられた。私が死んで行く傍らに神様が共にいて下さると思うと嬉し涙に溢れ、それと同時に、私の心から不安や恐怖が消え去り、平安そのものになった。このような平安はいまだかつて経験したことがない。夜一〇時になり、看護師が睡眠薬を持って来て「明日、貴方は大手術を受けるのでしょう。夜、心配の余り、眠れませんから、この睡眠薬を飲みなさい」と言って勧められたが、平安そのものであったので、御断りした。翌日、六時前に目が覚めたが、平安が続いていた。昼十二時過ぎに看護師がストレチャーを引いて迎えにきて六階から三階の手術室まで連れて行かれ、手術台に載せられたが、平安そのものであるのに、我ながら驚いた。今日、手術中に死ぬかも知れないのに、どうして、こんなに平安なのか不思議でならない。その時、思い出したのは「わたしは平安をあなたがたに残して行く。わたしの平安をあなたがたに与える。わたしが与えるのは、世が与えるようなものとは異なる」（ヨハネ一四章二七節口語訳）このみ言葉である。今、私が体験している平安は、このみ言葉に言うこの世のものとは異なる平安ではなかろうかと思った。先のヨシュア記の御言葉は神から不意に啓示されたみ言葉である。このように、み言葉は神から一方的に不意に示めされることもある。

第50回九州アシュラム報告

事務局　鮫島　則雄

第五〇回九州アシュラムは昨秋九月二〇～二一日の両日、いつもの会場である福岡・宗像市のカトリック『黙想の家』で開催されました。今回は時を同じくして全国アシュラム記念大会がＹＭＣＡ東山荘で開催されるということでどう対応しようかと役員一同で話し合った結果、一年前から会場予約していた都合上、期日変更が出来ず、やむを得ず当九州地区からは委員長の岡山敦彦師だけを派遣するという形で、私たちは宗像の地で、全国アシュラム記念大会の祝福と盛会を祈りながら行ないました。

今回の助言者は、今村幸文師（日本バプテスト連盟福岡早良教会牧師）でした。

今村師は長年牧会に従事され、九州地区での牧会中には、九州アシュラムの委員長としても奉仕されていましたので安心して助言をお願いできた次第です。今村師は一旦第一線を退かれてご息女の伴侶が牧会されている教会で協力牧師として奉仕されていましたが、福岡の教会から現役復帰の要請を受けられ、また伝道牧会の第一線で活躍されています。今回の参加者は、いつもの祷友に加えて、都合で欠席された方々に代わって家族や友人を誘っての参加があり、また神学生も新たに加えられての開催となりました。主題は『祈りに生きる』、主題聖句として「目を覚まして感謝を込め、ひたすら祈りなさい。（コロサイ書四章二節）」を掲げての学びとなりました。現代社

会は情報社会ともい合われているほど、洪水のように大量の情報が押し寄せてくる中に生かされています。そのような中で、主の民として生きるために、ひたすら祈ることの大切さを、長年牧会に携わって来られた今村師より貴重な助言をいただきました。

恵みの証しでは、参加者それぞれが「祈りに生きる」ことの大切さを再確認されたとの声が多く聞かれました。委員長不在の中での大会となりましたが、全国大会で奉仕されていると聞いて参加者全員納得していました。今度の五一回大会で、アン・マシューズ女史を迎えての全国大会のおみやげ話も聞けることでしょう。

第49回関西アシュラム報告

事務局　脇田　眞一

二〇一五年九月二〇日（日）午後三時～二一日（月・祝）午後二時まで、神戸市東灘区御影町の「母の家ベテル」で、第四九回関西アシュラムが開催された。参加は十五教会、二七名（信徒十七名、教職一〇名）であった。主題は「キリストへの明け渡しと服従」、主題聖句は「わたしはキリストと共に十字架につけられた。生きているのは、もはや、わたしではない。キリストが、わたしのうちに生きておられるのである。」（ガラテヤ人への手紙二章一九～二〇節、口語訳）である。

二〇日（日）の「開会の祈り・ディボーション」は清水潔師が担当し、「開心の時」は脇田眞一師が担当した。今回は助言者として中沢隆一師（前）関西聖書神学校校長、牧師）を招き、同師が「福音の時」と二十一日の「朝の祈り」を担当してくださった。また、二十一日の「静聴・分かち合い」は小島十二師が担当し、みことばと出席者全員の体験の恵の証言が語られた。また、「充満の時」は脇田眞一師が担当し、先の「静聴・分かち合い」の場合よりも簡潔に、みことばと出席者の体験の恵の証言が語られた。

助言者は「福音の時」に、信仰について御自分の体験を交えながら、説明され、聖書を信じて従うことが大切であり、御言葉に聴き、従い、祈ること、人は御言葉によって清められるとの神の深い恵みについて話された。また、「朝の祈り」では神の愛について話され、人の救いについて、罪の赦しと悔い改めについて話され、御言葉に聴き、従うことの大切さと祈りについて話された。このようなことを御自分の体験を交えながら分かりやすく語り、深い信仰の導きと励ましを戴いたことに心から感謝している。（なお、同師は二〇一五年十一月七十七歳で急逝された。）

次回の関西アシュラムは二〇一六年一〇月九日（日）～一〇日（月・祝）、場所は「母の家ベテル」、主題「御言葉への静聴と立証」、助言者工藤弘雄師（日本イエス・キリスト教団香登教会牧師、（元）関西聖書神学校校長）のもとに開かれる。多くの方々の参加を祈っている。

アシュラム予告

●第54回関東アシュラム
とき　'16年9月19日(月)～21日(水)
会場　山崎製パン箱根山荘
助言者　内村撒母耳師
（アッセンブリー名古屋神召教会牧師）

●第51回九州アシュラム
とき　'16年9月18日(日)～19日(月)
ところ　福岡黙想の家
助言者　安藤脩師
（横浜岡村教会牧師）

●第50回関西アシュラム
とき　'16年10月9日(日)～10日(月)
ところ　母の家ベテル
助言者　工藤弘雄師
（日本イエス香登教会牧師）

●横浜岡村アシュラム
とき　'16年7月16日(土)～17日(日)

〒一八一―〇〇一一　三鷹市井口3―15―6
池の上キリスト教会内
日本クリスチャン・アシュラム連盟
振替口座　東京〇〇一〇〇―一四五五八